

互いに平和に過ごしなさい Ver.2

(テサロニケの信徒への手紙 1 5章 12~15節)

5月から読み進めておりますテサロニケの信徒への手紙第一も、いよいよ結びの言葉に入りました。この手紙の場合、挨拶から始まり、つぎに信徒たちの新たな生活ぶりについての称賛と、彼らをそのように生かしている神への賛美と、いまのそのあり方をぜひ、今後も続けてくださいという勧めがありました。神に喜ばれる生活という部分ですね。これが本題その1で、まず主に結ばれて生きている彼らのあり方を持ち上げておいて、それから、彼らの心配事、当時、テサロニケの信徒たちのあいだで話題となっていたキリストの再臨についての話題、そして、キリストの再臨に立ち会うことなく召された自分たちの信仰の仲間である兄弟姉妹はどうなってしまうのかという不安について答えています。この部分がこの手紙の中心で、それを終えて、最後の結びの挨拶に入った個所を、今日ご一緒に読んだのです。

ここまで読み終えたわたくしの感想は、ああ、教会の時代が始まったんだなあというものです。紀元50年頃に書かれたこの手紙は、新約聖書で一番ふるい文書ですが、これが大体イエスさまが十字架で死なれてから約20年後です。まだ実際にイエスさまを知る人たちが生きていた頃であり、その証人たちがイエスさまの教えに従って、聖霊の働きによって送り出されて、福音を宣べ伝えてゆきました。なかでもパウロは異邦人のための宣教者として、地中海伝道に赴き、ヨーロッパにわたってギリシアの地にあるテサロニケに、教会を建設したのです。フィリピにつづく二番目の教会でした。いま教会と言いましたが、信徒への手紙、となっていますように、教会あての手紙ではないですね。建物として現在のような十字架をかざした教会堂が

建っていた時代ではありません。だれかの家に集まって礼拝がもたれていた。家の教会と呼ばれるような時代です。つまり、まだ始まったばかりなのです。建物も、組織も、教理も確立されていません。もっといえば、この時代、4つの福音書はまだ現在のかたちになっていません。何もかもが手探りの状態です。わたしは主から受けたことを、またあなたがたに伝えたのであるという口伝えの教えの時代、そして、このテサロニケの信徒への手紙を含む新約聖書に収められている手紙を読んでいますと、パウロたちが、うしろから追いかけてくるユダヤ教の律法主義と戦い、前にひかえる地中海世界のさまざまな教えや偶像礼拝と戦い、キリスト・イエスにおいて示された福音にもとづいて、人格と人生と共同体を形作ろうとしていたことが分かります。キリスト者の生きる一種のコロニー、教会共同体を形作ろうとしている。そのときに、当時の地中海世界では当たり前でも、聖なる神の共同体にとっては避けなければならない事態はたくさんありました。日本に明治時代にキリスト教が再び入ってきた時も禁酒禁煙であるとか、一夫一婦制を主張するとか、生活上の独特のルールを持つことからピューリタン、清教徒などと呼ばれたことは有名です。それは文字通り、この世とは異なった価値観であり、新しい文化と新しい生き方を生み出してゆく群れ、神さまのご支配をこの地上において現わしてゆこうとするチャレンジでした。それは今日でも変わることはありません。教会はいつもこの世の文化に対するカウンターカルチャーとして存在する場所、天国の出張所なのです。主イエス・キリストに結ばれたことによって神の子とされた者たち、このキリストを着た者たちの新しい生き方が問題にされていたのです。もちろん、彼らの生活が一瞬にして変わったということはありません。それは、わたしたちの場合も同じだと思います。むしろ変化はゆっくりと、しかし確実に働いてわたした

ちを変えてゆきました。それぞれの人生の選択の時、苦しみや悩みの時に、わたしたちは神の言葉が真実であり、力があることを知らされてきた。また自分たちの群れの中にいる兄弟姉妹の祈りや、その生きざまに示される神の愛を知らされて、共に生きる恵みを味わってきた。そうやって成長してきた。キリスト者は群れで生きるのであり、個人で生きるのではないのだと知らされます。さきほど、わたしは、この手紙を読んで、ああ、教会の時代が始まったんだなあと言いました。実際、ローマの時代のキリスト教思想家が「教会を母として持つことのない者は、神を父として持つことは出来ない」という言葉を残しています。その通りですね。主イエスや、パウロたちの時代から 2000 年近くの隔たりを生きるわたしたちがキリストの教えを信じて生きる者とされたのは、主の教えに生きる人々の集まり、教会があったからにほかなりません。教会が、礼拝が、神の民を生み出すのです。教会の時代がはじまっている。イエスさまがもういらっしやらなくなって、イエスさまの語っておられた言葉を伝えながら、守りながら、この地上で与えられた命を用いて生きてゆく。互いに召された者たち、救われた者たちが集いあって群れとして生きてゆく時代、そのなかに聖霊が働く時代、ここでパウロがテサロニケの信徒たちに勧めている言葉を読んでいると、いまここに集う半田の信徒たちに向かっての、パウロの言葉にも聞こえてくる。やはりつながっているのです。5 章 12 節以下で、パウロは、テサロニケの信徒たちを群れとしてまとめ上げようと労苦しているたちを、愛をもって尊敬しなさいと勧めます。わたしたちの教会では、コロナウィルスのために延期していた役員任職式を 7 月に行いましたが、日本基督教団の式文のなかにある役員の務めと教会員への勧めは、まさにここでパウロが言っているように、教える働き、導き、戒める働き、いにしえからの羊飼いの働き―「あなたの杖、あなた

の鞭、それがわたしを力づける」と詩篇 23 に謳われたような一そういう働きですね。2千年を通して、同じことが言われています。こういう働きをする人たちを敬いなさい。愛をもって心から尊敬し、互いに平和に過ごしなさい、とパウロは勧めるのです。パウロの焦点は主イエス・キリストに結ばれた群れ、すなわち教会の枝である一人一人を整えることによって、主の栄光を現わすことでした。その方法はここではふたつの方向を持っています。ひとつは「愛をもって心から尊敬し、互いに平和に過ごす」ことです。キリストが仕えられるためではなく、仕えるために、わたしたちのところに来て下さったように、裏切った者たちを責めるのではなく、赦しを告げるために来られたように、求められているのは評価して切り捨てるのではなく、愛をもって群れの中の一人一人と関わることです。主の愛は十字架の愛であり、赦しの愛でした。他者の弱さを覆うこと、そのために立ち帰りを待ちつつ、諫めること、戒めることが、ふたつめの方向でした。14節以下に、テサロニケの信徒たちのなかに「怠けている者たち」「気落ちしている者たち」「弱い者たち」がいたことが記され、これらすべての人たちに忍耐強く接することを求めています。愛をもって共にある姿勢と言ったらよいでしょうか。それは決して飴玉を与えて甘やかすことではありません。正義のないところにほんとうの平和はない。互いに平和に過ごすためにも厳しさは当然必要なのです。ここでいう「気落ちしている者」とはがっかりしている者ではなく、救いの確信を薄れさせてしまったことで希望を喪った者たちのことです。「弱い人」も体が弱いのはなく意志が弱い人、そのために地中海世界の不道徳の世界に引き戻されてしまう人が群れの中にいる。「怠惰な者たち」も同様です。福音の中心であるキリストから信仰の目が逸れるとそういうことが起こる。群れで生きる教会は、信徒たち全員でマラソンをしているようなもの

です。当然、ゴールがあるわけで、そのゴールを見据えていないとコースアウトしたり、走るのを止めてしまったりする者が出てくる。そういうことがないように、群れの中にあって彼らのために働いてくれる人たちのことを、愛をもって尊敬し、互いに平和に過ごすことを勧めているのです。一致の基礎はすべて主イエス・キリストにあります。わたしたちは互いにそれぞれ違いを持った者たちです。それでよい。同質になる必要はない。ただ本質は見失ってはならない。見上げている方向が一緒であること、ゴールすなわち約束された希望を確認し、神の義と神の愛のクロスした十字架の許に常に立って生きること、そこに互いに対して平和に過ごす礎が据えられているのです。主の愛に慰められ、罪赦された罪人であることを互いに弁えて感謝の応答として生きるとき、自分をささげてゆくとき、そこに主の与える平和があらわされてゆく、教会とはそのような場所であります。教会に住んでいますと、実際にそういう方を多く目にする。平日にきて諸集会のために準備をされていて下さる人、会員に週報を届けようと持って行ってくださる人、オルガンの練習をされる人、お茶の仕分けであったり、看板を届けて下さったり、群れのために労苦して（と、ご本人は思っておられないと思いますが）、働いて下さる人がいる。また祈りに来られる人がいる。そうした方々への感謝をあらわしてゆくこと、互いの奉仕のあり方に目を向けていくことが、主に召し集められた群れを生かす大切な働きであり、みずからをささげる愛の奉仕を見出すわたしたちの生きる道です。パウロの言葉を、教会につながるひとりひとりに与えられた招きとして受け止めたく願っています。

お祈りいたします。

神さま、暗い夜の間も守られて、新しい朝、主の復活の日の聖日にわたしたちを招いてくださり、御言葉によって、わたしたちのよろめく足を支え、目指すべきゴールと、召された者たちに対する愛と敬意をもって歩むことを教えて下さり、感謝をいたします。これらすべての礎となり、道となり、門となってくださったわたしたちの贖い主、裁き主、救い主であるキリスト・イエスと、天地万物の創造主であるあなたからの聖霊が、わたしたちの群れを清め、ひとりひとりをあなたの子としてふさわしく歩ませてください。いまこの場に様々な理由で集うことのできない者を顧み、御国にむかってともに歩ませてください。この祈り、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン